

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者：高橋和子

本論文は、日本の英語教育の現場において文学教材の使用が減少した経緯を 1980 年代から 2000 年代の期間を中心に分析し、その事象を不相当と見なす立場に立って、とくに大学英語教育における文学教材の有効性をさまざまな角度から論じたものである。

まず序論は、大学生の授業アンケートの結果に基づいて彼らが英語の授業における文学教材の使用を好意的に受け止めていることを示したのち、その一方、中学校と高等学校の『学習指導要領』に典型的に見られるとおり、日本の英語教育が「実践的コミュニケーション能力」を狭義に解釈して実用主義を奉じ、その育成に役立たないものとして文学を排除してきた経緯を概観する。

第 I 章では、コミュニケーション能力育成が重要視されるようになってから、中学校、高等学校、大学の読解教材としてどのようなものが使用されてきたかが論じられている。そして、文学教材が敬遠されるに至った経緯が資料を元に示されている。

第 II 章では、海外の英語・外国語教育における文学教材の扱いが論じられる。そして、韓国・中国などのアジア諸国においては日本と同じ文学離れの傾向が見られる一方、Communicative Language Teaching (CLT)発祥の国たる英米は、むしろ文学教材を本来の意味でのオーセンティック教材（実生活においてメッセージの授受を行なうために、書かれたり話されたりした用例を題材にした教材）と見なし、コミュニケーション能力育成のための活動においてそれを活用しているとの指摘がなされる。

第 III 章では、コミュニケーション能力育成の目的に沿って CLT を導入した場合、オーセンティック教材として文学教材は非常に有意義な選択肢であるとの主張がなされる。日本の英語教育においてはオーセンティック教材の意味が「日常的で具体的な題材を教材化したもの」と狭義に解釈され（この意味で解釈されたものを、「オーセンティック」教材という具合にカギ括弧つきで表記する）、そのために文学教材が排除されているが、その狭義の解釈を是正し、正しい意味でのオーセンティック教材として文学教材を活用すべきというのが議論の流れである。

第 IV 章においては、前章までの議論を踏まえ、とくに日本において狭義に解釈された「オーセンティック」教材と文学教材との間に本質的な違いがあるのかとの疑問が提示される。そしてその疑問に答えるための手がかりとして、Carter, R. and Nash, W. (1990) *Seeing through Language: A Guide to Styles of English Writing* が提示した、文学というジャンルを越えた“literariness”の概念が導入される。

第 V 章では、creativity という指標に即して見た場合、日本の英語教育で「オーセンティック」と見なされる題材もかなりの creativity を含んでおり、それを十分に含んだテキストを提供するのであれば文学のほうが適しているとの議論がなされる。

第VI章では、narrativity という指標に即して見た場合、狭義の「オーセンティック」教材にもそれが十分に存在することが示される。そして、narrativity の豊富な文学教材がコミュニケーション能力育成の活動にも活用できるとの議論が展開される。さらに本章の最後の部分では、第IV・V・VI章のまとめとして、“literariness”, creativity, narrativity の観点から見て、いわゆる「オーセンティック」教材と文学教材との間に明確な違いはなく、文学教材を排除してきたこれまでの日本の英語教育のあり方には再考すべき点があるとの主張が展開される。

第VIIでは、文学教材のメリット・デメリットが議論されたのち、文学教材を使用した大学での授業実践例や中学・高校用の授業案が示される。

文学教材が本来の意味でのオーセンティック教材としてコミュニケーション能力育成を促すとの主張は明快であり、それを裏付けるための十分な考証もなされている。また、文学教材がコミュニケーション能力育成に貢献するとの視点は、従来の英語教育の議論における「教養対実用」、「文法・読解対コミュニケーション」といった単純な二項対立を越えた新しい視点であり、本論文はそれを提示した独創的なものである。一方、英語教育における文学教材の扱いを論じる上でいくつかの課題も残された。たとえば、狭義に解釈された「オーセンティック」教材にも文学教材に通じる要素があるとすれば、殊更に文学教材を導入する必要はないとの論も成り立ち、それを論駁して積極的に文学教材を推奨するところまでの論が展開されてはいない。本論文の趣旨から逸れる部分もあるが、文学作品にも独自の教育的価値があり、それに関する論考もなされていれば、さらに論文の深みが増したと思われる。とはいえ、これらの課題は、本論の主張が明快であるがゆえに顕在化したものであり、その価値を損なうものではない。何より、日本の英語教育における文学教材の位置をここまで網羅的・包括的に扱った論文はかつてなく、本論文には、今後の日本の英語教育に多大の貢献をすることが期待される。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。